

第3回「広島県教育のグローバル化10年展開構想（仮称）」意見交換会の概要

1 開催日時

平成26年9月4日（木）9:00～11:00

2 開催場所

広島県自治会館会議棟2階 201会議室

3 出席者

(外部有識者) 今井 むつみ	慶應義塾大学 環境情報学部 教授
大竹 美喜	アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社) 創業者・最高顧問
坂田 淳二	Prime Field Asia Limited CEO, ARIGATO HOCKEY 代表
滝村 典之	マツダ株式会社 人事室 副室長
坪内 南	一般財団法人教育支援グローバル基金 理事・事務局長
湯崎 英彦	広島県知事
下崎 邦明	広島県教育委員会教育長

(五十音順, 敬称略)

4 議事要旨（主な意見）

(1) 広島版『学びの変革』アクション・プラン（仮称）について

- ・ 教育は教育機関だけがその役割を担うものではない。社会全体で担うものである。企業も地域も参画意識を持ち、皆で取り組まなければならない。
- ・ 民間から広く支援を募らなければならない。国の留学促進キャンペーン「トビタテ！留学JAPAN」は幹部が先頭に立って民間企業に支援を募っている。広島県もどこまで理解を深めることが出来るかが肝になる。
- ・ 県内各地でグローバル・キャンプなどを実施してはどうか。その様子を保護者に見てもらい、そこから理解を深めてもらうというのも一つの方法だ。
- ・ このアクション・プランを全て一気に進めるのは難しい。まずはグローバルリーダー育成校で一点突破してはどうか。県が何をしようとしているかを、実際に県民に見てもらうことで理解してもらうことが大切だ。企業も実際に見ることで何が出来るか考えるだろう。
- ・ アクション・プランのPDCAサイクルを回していくためには、それを測る指標が必要だろう。特にグローバル人材の育成には、心の健全は必須である。
- ・ アクションを起こさなければ何も始まらない。アクションの積み重ねを県民や保護者に発信していくことが大切である。いろんな困難を想定していても、実際にやってみたら全然違う結果になることもあるだろう。このプランはワクワクするような仕掛けがたくさん詰まっている。出来るところから進めた方がいい。

(2) グローバルリーダー育成校（仮称）について

- ・ 設立の目的について、県民目線で分かり易く3つくらいの言葉にまとめてはどうか。
- ・ 県だけではなく、国やその他様々なところと一体になって進めてはどうか。
- ・ 他を大きく巻き込んで進めるのも良いが、逆に、それで広島の独自性が失われるようなことになってはいけない。最初はコアの部分だけ、県独自で始めた方が進めやすいかもしれない。
- ・ まずはサマーキャンプなどで実験的プロジェクトを行い、課題を明確にしてはどうか。

- ・ 学校設立の準備チームが必要である。民間からの資金調達も必要だ。海外の学校は、生徒の公募や教職員の確保には、それぞれ専任のスタッフがいる。広島でもそれだけの体制を整えて準備が出来るかどうか成功の鍵だ。

I グローバルリーダー育成校のミッション・育成すべき人材像

- ・ この学校の理念を一番分かりやすく示すことが出来るのは、どういう方法で生徒選抜を行うかだと思ふ。従来型の知識を問う入試ではなく、大学入試改革に先立った選抜をするというものがあればよい。
- ・ 海外から見たとき、この学校はどう映るのかという視点が必要である。日本からの目線と海外からの目線は違うだろう。「こういう人材を輩出できる学校」であるとか、「このように国際機関で世界に貢献できる」などのように、もっと具体的にした方がいい。子供たちが「この学校へ行きたい」と思えるような、分かりやすさも必要である。
- ・ 抽象的な言葉で何となく理解したつもりでいると、結果的にみんなが違うイメージを持ってしまう。具体的な共通イメージを皆が持たないといけない。
- ・ 公立高校の理念は属人的であってはならず、ユニバーサルでなければならない。そうでなければ県全体を巻き込んで変革することは難しい。

II グローバルリーダー育成校の教育プログラムの特色

- ・ 海外では、教育施策は地方レベルで決定しており、人事などを学校独自で決めていることも多い。日本は学習指導要領によって国全体の教育が一定水準を保っていることがメリットではあるが、地方が自立して動けないというデメリットにもなっている。
- ・ 子供たちが自分にブレーキをかけて 18 歳で自分の能力を決めてしまい、人生まで決めてしまっている。深く考える「思索」が欠けている。これまでの日本の教育は、一定の成功を収めてきたが、変わらなければいけない時期に来ている。
- ・ 国も大きく改革しようとしている。地方も斬新なことをしていけないと意味がない。
- ・ スポーツの場合、日々の練習が P D C A である。失敗から課題を発見し、30 秒後には改善するというスピードで P D C A サイクルを繰り返す。その中で、失敗に対する抵抗力や免疫力が養われる。
- ・ 将来の明確なイメージや目的があれば、そこに至る過程は目的とのギャップを埋める作業をしているだけと考え、失敗に対して恐れなく進んでいける。「失敗はチャンスだ」とポジティブな言葉で自分のモチベーションを高めることが出来る。
- ・ 会社でも自分で考えて行動するのではなく、上司に伺い、周りの状況を見て判断をしている人が多い。つまり、PD の繰り返しで、P D C A になっていない。
- ・ 学校は知識を使う場所である。そういうプログラムにしていきたい。教職員が一体となって実践できることが大切である。
- ・ 人はどうやって熟達者になるか。それは毎日の積み重ねである。「今日よりも明日」という積み重ねの努力が出来る人が天才と言われる人である。こういう心構えは、子供たちに言っただけでは伝わらない。そういう姿を見せないと伝わらない。
- ・ 探究型学習については、全てを大人がテーマパークのように準備してしまうと、子供は用意されたものを選ぶだけになってしまう。
- ・ どんなによい教育プログラムを提供しても、そのプログラムを「楽をしてこなそう」としか考えない生徒はなかなか伸びない。大学でも失敗から這い上がらなければならぬようなプロジェクトには学生が集まりにくい。
- ・ 地球規模の問題に対しては、当事者意識がないと意味がない。東北の学生たちは、震災という原体験があるからこそ、当事者として考え、踏ん張ることが出来るようになったと言っている。学校のカリキュラムの中だけで意識を変えるのは難しい。実体験として学ぶ場が必要である。例えば、新興国の現地に行かせるなど、感性に訴える仕組みが必要である。

Ⅲ グローバルリーダー育成校をコアとした「広島教育ブランド」の確立

- ・ 多様性の創出は、外国人生徒がいることだけで出来ることではない。海外との交流だけではなく、フレキシブルスクールの生徒との交流も面白いと思う。実社会との関わりを大切にし、様々な学校の生徒と関わりあいの中核となることで、県全体の学びの変革が生まれる。
- ・ 県全体への波及効果のみならず、国内へ、海外へと波及していくような取組みが出来たら素晴らしい。例えば、国際バカロレアの中で日本語や日本文化を学び、日本ファンとなったグローバルリーダーが増えていくことは、日本によい経済効果をもたらすことにもつながる。
- ・ 一部の生徒に特別な教育を施すために公費を投入するのか、という批判があるようだ。しかし、それは「広島版『学びの変革』アクション・プラン（仮称）」の全体像を知らないからだ。全体像を知れば、グローバルリーダー育成校の必要性が分かるはずだ。
- ・ グローバルリーダー育成校を始め、専門高校、フレキシブルスクールなど、多様な人材層の形成に向けた学校体制を整備しようとしている。しかし、その全体像を理解していただくのは時間がかかる。まずは、グローバルリーダー育成校で成功モデルを作り、それを中高一貫校に還元し、さらに県全体に波及させていくことが必要だろう。